

第2学年A組 図画工作科学習指導案

授業者 進藤 亨
研究協力者 長瀬 達也

1 題材名 ポーズでつたえよう〇〇している生きもの（立体）

2 子どもと題材

(1) 子どもについて

子どもたちは、1年生では、油粘土を用いて好きなものをつくる活動を行った。油粘土の形成しやすい特性を生かして、丸めたり、伸ばしたり、くっつけたりしながら、好きな動物、好きな食べ物、好きな店、好きな建物、好きな場所など様々なものを表した。小さな部分をつくって組み合わせるつくり方がほとんどであった。

2年生では、油粘土を用いて、一番好きな生き物をつくる活動を行った。胴体に顔や手足を接着して積み木のように立体に表すなど、ほとんどの子どもたちが表したいことを形にすることができた。中には、竜の背中のごつごつとした感じや鳥の羽の模様まで表している子どもも見られたが、「〇〇のような感じ」という、生き物の様子まで表すことができていない子どもはあまり見られなかった。そして、子どもたちからは、もっと生き物の特徴が表れるようにつくりたいという声も多く聞かれた。土粘土を用いて、よりはっきりとした形をつくる段階に入っているものとする。

(2) 題材について

本題材では、土粘土を用いて好きな生き物をつくる。そしてここでは、つくりたい生き物の形をつくることだけにとどまらず、「〇〇のような感じ」や「〇〇している様子」がわかるまで表すことを意識させたい。どこの部分のどんな形から、「〇〇のような感じ」や「〇〇している様子」がわかるのかを見合う場を設けたり、具体的に動きをイメージできる言葉や動作を確認したりすることで、動勢までねらうことができると考える。

油粘土は、小さな部分を接着させながらつくるができることから、低学年の子どもたちの特徴である、つくりながらイメージをふくらませていくことに適した素材である。しかし、でこぼこした感じやとげとげした感じなどの質感やどっしりとした量感、動きが感じられるポーズなどがはっきりと表れづらい面もある。そこで、土粘土を用いることで、よりはっきりとした形や質感を表すことができるようにしたい。また、土粘土は、大きなかたまりからひねり出して形をつくる必要がある。油粘土と異なるひねり出しでつくる技法が必要となるため、高まってきた手の巧緻性に対応できる素材でもある。

本題材の活動を通して、生き物の形を変形させながら発想を広げていく力、自分の表したいイメージをよりはっきりとした形にしていく力が育つと考える。

(3) 指導について

本題材における新たな価値は、「〇〇のような感じ」や「〇〇している様子」がわかるなど、つくりたいイメージをもつという「見方・考え方」をもとに、表し方を工夫していくことである。生き物の形をつくる段階では、どんな生き物をつくるのかを決めることができるように、生き物の写真や参考作品を提示する。つくりたい生き物のイメージをはっきりとさせるために、それぞれの生き物の特徴を確かめ合う場を設ける。また、イメージした形を表現へとつなげるために、2本足の生き物、4本足の生き物などに応じたおおまかな形のつくり方を示す。生き物をイメージ通りの形につくるができないという技能面で困る子どもがいると予想される。その場合は、教師が積極的にかかわり、頭や手足などのひねり出し方や適切な量を示すなど、個に応じた支援をすることで活動を支えていく。

大まかな形ができたなら、生き物の名前や住んでいる場所、得意なことなどを考える時間を設けることで作品に対する思いを深め、どんな様子を表すのかを決めることができるようにする。そして、参考作品の鑑賞を通して、口を小さく開いた形と大きく開いた形では、どちらがおいしそうに食べているのかを比較したり、粘土の表面をつるつるにした場合とでこぼこにした場合では、どんな感じがするのかについて確かめ合ったりして、作品づくりに生かすことができるようにする。ひねり出しでつくと、頭部が小さくなってしまったり、手足が細くなってしまったりする傾向がある。つくりたいイメージをはっきりと表すことができるように、必要な粘土の量についてもつかませる。そして、表したいポーズのイメージをはっきりとつかむことができるように、実際に動作化する活動も取り入れながら活動を進めていく。

3 題材の目標〈記号は本校の資質・能力表による〉

- (1) 表したい生き物をつくることに関心をもち、生き物のイメージをはっきりともって造形活動を楽しもうとする。 〈a-1〉
- (2) 生き物が好きな食べ物や得意なことなどを考えながらつくることを通して、表したい生き物のイメージを広げる。 〈b-8〉
- (3) つくりたい生き物の感じや様子が表れるように、粘土の形や量を工夫してつくる。 〈c-30〉
- (4) 自分がつくった生き物について友達に紹介したり、友達のつくった生き物の表し方のよさや面白さに気付いたりする。 〈d-19〉

4 題材の構想（総時数4時間）

時間	学習活動	教師の主な支援	評価〈本校の資質・能力との関連〉
1 2	(1) つくりたい生き物のイメージをもち、〇〇のような感じや〇〇している様子がわかるようにつくる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ つくりたい生き物のイメージをつかむことができるように、もとになる生き物の写真や参考作品を提示する。 ・ 表したい様子を見付けることができるように、生き物の特徴やどんな動きがあるのかを確かめ合う場を設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分がつくりたい生き物のイメージをもち、活動を楽しみながら進めようとする。 〈a-1〉 ・ つくりながら生き物のイメージを広げ、特徴や様子が表れるようにつくる。 〈b-8〉〈c-30〉
3 本時	(2) 特徴や様子がわかるように表し方を工夫して生き物をつくる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 〇〇している様子を表すポーズに気付き、自分の作品づくりに活かすことができるように、小さく開いている口と大きく開いている口などを比べて鑑賞する場を設ける。 ・ 自分が表したいイメージをはっきりとつかむことができるように、動作化してポーズを確かめる場を設ける。 ・ 表し方がわからず困っている子どもには、特徴と一緒に考え、つくり方を紹介する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ つくりたい生き物の特徴や様子が伝わるように表し方を工夫する。 〈b-8〉〈c-30〉
4	(4) つくった作品を見合い、表し方のよさや面白さを見付ける。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 表し方の工夫を具体的に見付けることができるように、「〇〇しているように見える」、「〇〇な感じがわかる」を鑑賞の視点として示す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分や友達の作品について話し合いながら、表し方のよさや面白さを見付ける。 〈d-19〉

5 本時の実際 本時(3/4)

(1) ねらい

表したい生き物の感じや様子がわかるように、粘土の量や形を変えながら、イメージに合った表し方を工夫する。

(2) 展開

○：「仲間との対話」を生かして新たな価値を創造するための手立て

時間	学習活動	教師の支援 評価
15分	<p>① 参考作品を見合っ、様子や特徴をよくとらえた表し方の工夫を見付ける。</p> <p style="text-align: center;">【仲間との対話】</p> <p>(予想される子どもの反応)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 口を思いっきり開けると食べている様子が伝わるな。 ・ でこぼこやとげとげから、強そうな感じが伝わってくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ～している様子を表すポーズに気付くことができるように、小さく開いている口と大きく開いている口などを比べて鑑賞する場を設け、自分の作品づくりに生かすことができるようにする。また、形だけでなく、粘土の量を増やして大きくすることで効果が増すことにも気付かせる。 ○ 自分が表すポーズのイメージをつかむことができるように、動作化をしてポーズを確かめる活動を設ける。
<p>学習課題</p> <p>なにをしている生きものなのかが、友だちにもよくつたわるように、つくりにかたをくふうしよう。</p>		
25分	<p>② つくりたいイメージが表れるように工夫する。</p> <p style="text-align: center;">【自分との対話】【仲間との対話】</p> <p>(予想される子どもの反応)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 大きく口を開けると、本当に食べているみたいに見える。 ・ 首をひねったら、考えているみたいに見える、人間みたいだ。 ・ 粘土の量を増やして大きくすると、迫力がでるな。 ・ 羽を上を上げると、飛んでいるように見える。 ・ でこぼこの模様を付けると、生きているみたいだ。 ・ 耳を大きくしたら、かわいい感じが出てきて、つくりたい生き物らしくなってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ イメージがさらに広がるように、自分がつくった想像の生き物の「すんでいる場所」「得意なこと」「一緒に遊んでみたいこと」などを確かめる時間を設ける。 ・ イメージをもっているのに、なかなか形に表せない子どもには、イメージに合う形の例を提案したり、参考になる表し方をしている子どもを紹介したりして、具体化できるようにする。 ・ 発想が広がらない子どもには、つくっている動物の特徴を聞き、特徴が表れるような表し方を提案する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px; text-align: center;"> <p>つくりたいイメージが表れるように、生き物の特徴やポーズを意識して、粘土の量や形を工夫している。 〈b-8〉〈c-30〉(活動, 作品)</p> </div>
5分	<p>③ 本時の活動をふり返る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ どこを工夫したのかが具体的に伝わるように、「最初と変わったところ」「変えたらどのような特徴がよく伝わるようになったか」を問う。

(3) 「仲間との対話」を通して新たな価値を創造する子どもの姿

